資料　２－１

作―１

平成 18 年度　第 2 回 ExTEND2005 作用･影響評価 検討会　議事要旨

Ⅰ　日時：平成 18 年 8 月 25 日（金）　14:00～16:00

Ⅱ　場所：法曹会館 2 階　高砂の間

Ⅲ　出席者　（敬称略）：
委員：遠山千春（座長）、斎藤昇二、菅谷芳雄、原　彰彦、藤井一則
※欠席：白石寛明
オブザーバー：井口泰泉、青山博昭
事務局：上家環境安全課長　他

Ⅳ　議題：
１．哺乳類試験体系の合理化についての検討について
２．その他

Ⅴ　議事要旨
（１）4-t-ブチルフェノールのラット改良 1 世代結果について「哺乳類試験体系の合理化についての検討（案）」として報告された。今回採用した用量設定において、ヒトがばく露する可能性がある用量における変化の有無だけでなく、無影響量が算定できる動物試験が実施可能であることが確認された。
【委員からの主な意見】
・正向反射試験結果について「雄または雌のみに認められた変化であり悪影響とは考えられなかった」とする解釈は、正向反射試験成績に性差が本来、有るかどうかを考慮して再度考察する必要がある。
・背景値を影響の有無の考察に用いる際は、記載や取扱いに注意を要する。
・被験動物体重換算投与量（餌中の被験物質濃度より算出）、予想ばく露量（環境中最大濃度より推定）は計算過程を記載して欲しい。表の標題、用量記載についても改良が必要である。
・用量設定は対数目盛を用いて、均等配分して設定することが望ましい。
（２）環境保健行政における化学物質管理の変遷と展望、及びその中での ExTEND2005 の位置付等について「化学物質対策の展望について」として環境省から説明がなされた。
【委員からの主な意見】
・「内分泌かく乱」というエンドポイントには特にこだわらない方針を環境安全

課がもっていること等、今後 5 年間の取組がよく理解出来る説明である。

・生物の種・群・集団への影響評価において、化学物質に対する全体的取組の中で、「内分泌かく乱」をエンドポイントと位置付けていくことも可能であろう。

・影響評価（試験法開発）については、日米、日英共同研究も含め長期化を念頭に置く必要がある。

・個々物質の影響評価すらも進捗が遅れている状況ではあるが、複合影響に対する取組を案の段階でもよいから着手しておく必要性を感じる。

以上